



Impact of Visit-to-Visit Variability and Systolic Blood Pressure Control on Subsequent Outcomes in Hypertensive Patients With Coronary Artery Disease(from the HIJ-CREATE Substudy)

著者名	嵐 弘之
発行年	2016-06-17
URL	http://hdl.handle.net/10470/31582

主論文の要旨

Impact of Visit-to-Visit Variability and Systolic Blood Pressure Control on Subsequent Outcomes in Hypertensive Patients With Coronary Artery Disease (from the HIJ-CREATE Substudy)
冠動脈疾患を有する高血圧症患者における外来収縮期血圧変動が予後に与える影響

東京女子医科大学循環器内科学教室
(指導：萩原 誠久教授)
嵐 弘之

American J Cardiol Vol116, Issue2, p236-242 (2015 年 7 月発行) に掲載

【要 旨】

外来収縮期血圧の変動は、脳血管疾患の強い予測因子となっていることが知られている。しかし、虚血性心疾患を有する患者の外来収縮期血圧変動が予後に与える影響に関しては、十分に検討されていない。本研究の目的は、虚血性心疾患を有する高血圧症患者において、外来収縮期血圧の変動が予後に与える影響を明らかにすることである。

対象は、HIJ-CREATE 試験に登録された 2049 人のうち、診察時血圧データを有する 1734 人である。外来での血圧変動の順に 4 分位 (Q1~Q4) に分け、それぞれの患者背景、主要心血管イベント (MACE) 発生率の比較検討を行った。過去の報告では、大きな外来収縮期血圧変動は虚血性心疾患の独立したリスク因子となることが報告されている。しかし、今回の我々の検討では外来収縮期血圧変動と心血管イベントには相関関係は認められず、平均収縮期血圧のみが独立したリスク因子となることが明らかとなった。過去の報告結果と異なる理由に関しては、今回の対象患者が虚血性心疾患の二次予防患者を対象としており、より動脈硬化リスクの高い患者であることが挙げられた。動脈硬化が進行した患者群においては、血圧変動の持つ意義は異なる可能性が示唆された。